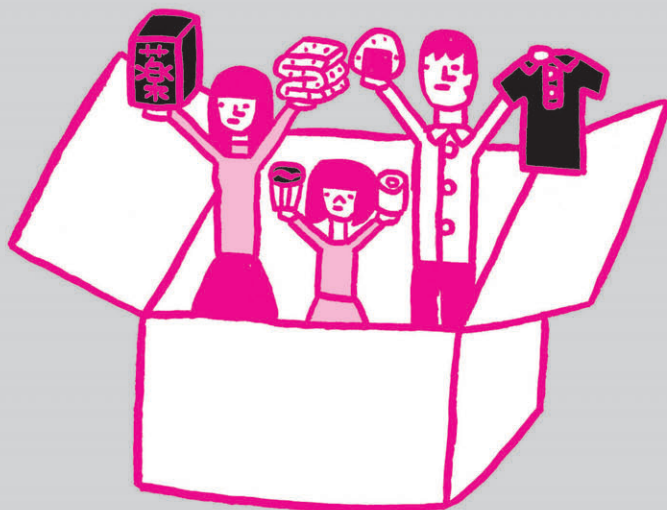


第 2 章

モノで支援しよう！



モノが足りなくて困っている人たちに、モノを送る。かんたんそうに見えて、こんなに難しいことはありません。ありがた迷惑にならないために、どんなことに気をつければいいのでしょうか？



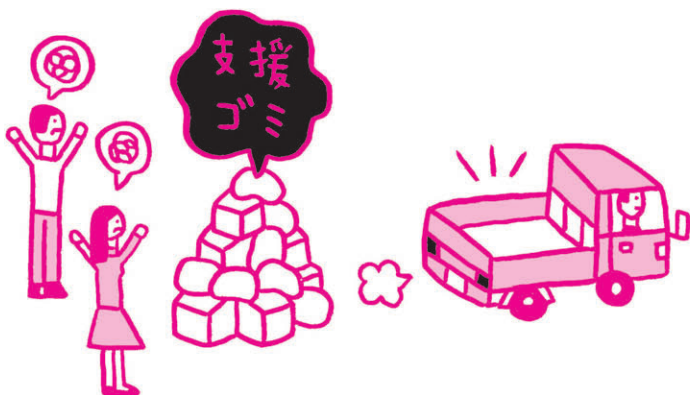
物資で支援する前に 考えておきたいこと

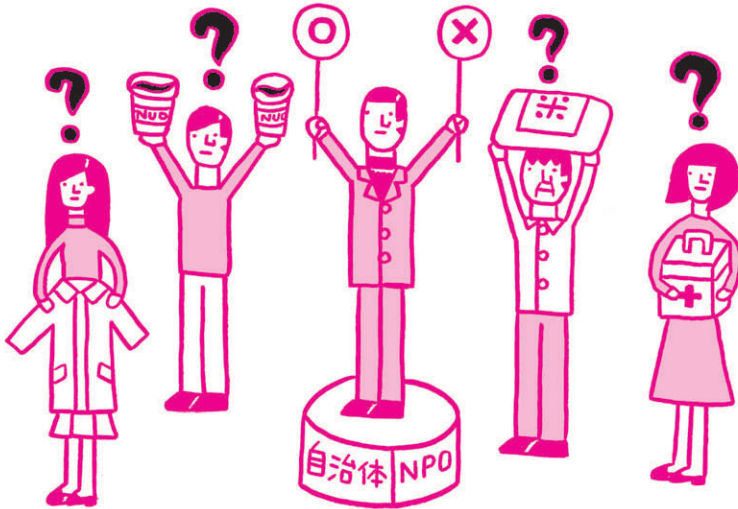
絶対に覚えておいてほしいことがあります。それは、「善意があれど、善行になるとは限らない」ということです。

「何かの役に立つかも」「喜ばれるかもしれない」といったあいまいな理由で送られてきた物資は、ほとんど役に立ちません。場合によっては大量の「支援ゴミ」を生むことになるのです。

では、「そんなこと言われても、何が絶対に必要なんでわからないし……」という方はどうすればいいのか。答えは単純です。そういうときは「何が必要かを知っている人」に教えてもらえばいいのです。

被災者に直接聞ければいいのですが、現地とのつながりがなかったり、連絡がとれなかったり、逆に問い合わせが殺到して迷惑になったりといったことも考えられます。そんなときは、「現地のニーズを知っている人」の情報を頼りにする。支援自治体や、実績のある団体が公式に募集している物資があれば、《募集期間内》に、《指定された場所》に、《指定された方法》で届ける。そのことで、被災者の役に立つ支援ができます。





物資は、「あてずっぽうで一方向的に送りつける」のではなく、「必要なものを責任をもって届ける」ことが重要です。それを代わりにやってくれる支援自治体やNPOがあれば、信頼性を確認したうえで「善行を託す」のがいいでしょう。

支援方法については、チェーンメールやツイートでのあやふやな情報ではなくて、あくまでも公式情報を得るようにしましょう。あてずっぽうなやり方では、不要な物資がゴミとなり、被災自治体の負担になってしまいます。

物資に関する正しい情報が見極められなければ、募金をするほうが無難でしょう。お金はあとで必要な物資に換えられますが、不要な物資は邪魔にしかありません。



被災地に必要なモノって何？

必要なモノは常に変わっていきます。



とくに災害直後は、日替わりで必要なモノが生まれ、不要なモノもまた生まれます。津波や豪雨で濡れてしまって着替えを持たない人がいれば、その日はたとえ古着でも着てくれるでしょう。でも2、3日経って新しく清潔な衣類や下着が届くようになれば、古着は好まれなくなります。

たくさんのカップラーメンが被災地に届きますが、お湯が沸かせるようになるまでカップラーメンは食べられませんし、お湯が沸かせるようになったときには炊き出しが始まっています。

災害初期の刻々と変わるニーズを、個人が把握するのは難しく、必要とされるタイミングで送り届けることはもっと難しいのです。活動経験の豊富な団体などを活用することで、トラブルは大幅に減らせるでしょう。

たとえば飲食店主がチームを組んで避難所で炊き出しを行うといった、自分たちの特技を活かした支援が大きな助けになる場合もあります。災害が起きてから不慣れな支援をしようとしても、うまくいかないことが多い。「得意な支援」を普段から把握しておくことが重要です。



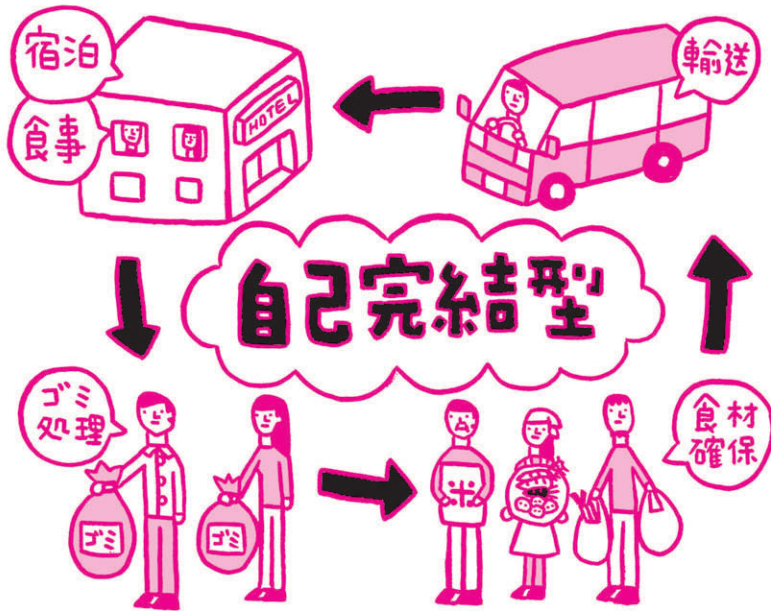
水がないのに
カップラーメン



毎日おなじ食べ物だと
元気が出ない



あたたかい食べ物は
人を安心させる



現地支援を行う場合は、輸送や資材・食料確保、宿泊に食事、ゴミの処理などすべて自分たちで行う、「自己完結型」の支援が鉄則になります。

にも関わらず、被災地の病院に「炊き出しをしたいから、食料を用意してください。被災者も集めてください」と依頼した団体もあつたくらい、未だに「非常識な支援」が見聞きされます。

自己完結型といっても、たとえば被災者から「いっしょにご飯を食べていって」と言われた際、決してその土地の食べ物をいただいはいけない、ということではありません。「あれをくれ」「これを貸して」「これ捨てておいて」といったたやりかたで、被災地に対して負担をかけることに注意すべきなのであって、被災者からの感謝の気持ちすべてをお断りする必要はないと思います。



支援物資を届けるにはどうすればいいの？

物資を確実に届けるため、まずは「現地のニーズを知っている人」との連携が重要です。



物資支援のおもな連携パターンをまとめてみると、次のようなものがあります。

○ 先遣隊型

少人数の人たちが先に被災地に入って、現地で必要とされているものを調べて報告。それを後方支援組に伝えて集めてもらうというかたち。ニーズを把握したうえで対応するので、ズレが生じにくいのがメリット。あとは、集めて配布するまでのタイムラグをどうするかが課題となります。支援する者が責任をもって、ネットなどで「これを集めています。私どもに送ってくれないか？」と呼びかける方法もしばしば見かけます。



○ ベース補給型

被災地に倉庫や物資の受け渡し所（ベース）を作り、そこに後方から《しっかりと仕分けした状態で》物資を送ります。仕分けは、現地・最前線ではやらないのが鉄則。ニーズに合わせてスピーディーに配ったり届けたりできるよう、できることは後方ですべて行いましょう。必要な物資を被災者などがベースに取りに行くパターンもあれば、ベースから避難所などに配布しにいくパターンも。



△ 配り歩き型

被災地の状況は把握していないけど、とにかく物資を持って行き、「いりますか?」と聞いて回る方法。災害初期にこうした行動を取ったうえで、特定の避難所などを受け持ち、その「先遣隊」となる方もいます。ただし、災害初期においては有効な場合もありますが、災害で傷ついた悪路を走行しながらの配布は効率的でないという面もあり、一長一短です。先遣隊型がやはり確実で、ベターでしょう。



△ 問い合わせ型

電話で被災地に問い合わせしてから、物資を運ぶ方法です。ニーズを聞くという意味では有効な手段のひとつ。一方で、先遣隊型と違い、電話対応するのに被災者の手を煩わせる可能性もあることは知っておくべきでしょう。「ネットに既に情報を載せているのに、その内容を電話で聞かれた」「問い合わせが日に何十件と来て、対応に追われた」といった声もあります。避難所や被災自治体に問い合わせが殺到するような事態は避けなくてはなりません。 unnecessary問い合わせは控え、上手に先遣隊型を活用しているNPOを支えるのがいいでしょう。



△ ネット活用型

ネットの普及で、広く被災地ニーズを発信することが可能になりました。ただし、「誰が」「いつ」「どこから」発信した情報なのかの明記・確認は忘れないようにしましょう。日付などが不明な情報が、古びたままウェブ上に拡散し続けると、余計な物資であふれかえることにもつながります。被災者がブログやSNSで「足りません!」と情報発信する場合がありますが、モノを集めて持っていったときには「いまはいりません」になることも。ネット上にはデマなども多くあるため、注意が必要です。



× あてずっぽう型

「自分はいらぬ人形だけど、避難所に子どもがいるかもしれないし、いたら喜ぶかもしれない」「この本、余ってるから入れておこう。誰かが読むかもしれない」——これらは絶対にダメなパターンです。「いるかもしれない」という不確かな根拠で送られた物資は、だいたいゴミになります。現地のニーズをしっかりと把握したうえで、必要なものを送りましょう。



↳ 大事なことは、「被災地」といっても、地域や人によってニーズは異なるということです。A市のBという避難所。C町のDさん。必要なモノはみんな違います。また、災害発生からの時間経過や季節によっても変わります。



支援物資を届けるときに注意することは?

物資を届けるときの鉄則は、「必要なものを」「必要なタイミングで」「負担をかけずに」「責任をもって」届けることです。



では、どうやって負担をかけずに届けることができるのか。そのことについて考えるために、あえて「負担のかかる届け方」を想像してみましょう。

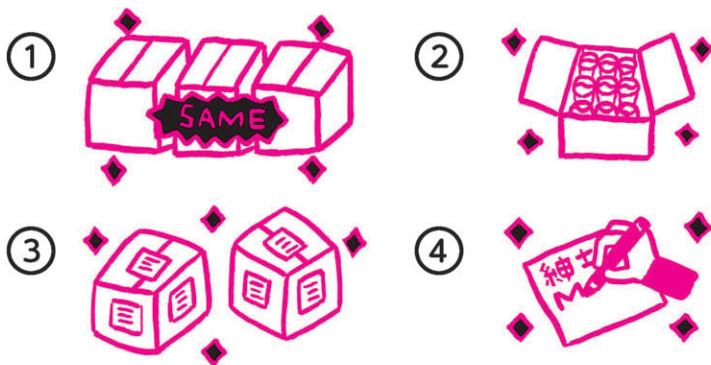
<p>中に何が入っているか、ダンボールの外面に書かれていない</p>			<p>何か書いてあるけど達筆すぎてまったく読めない</p>
	<p>ひとつの箱にいろいろなモノがごちゃごちゃに入っている</p>		<p>持つと手が汚れる</p>
<p>箱のサイズがバラバラ</p>		<p>はがしにくいテープで留めている</p>	
	<p>箱がゆがんでいて積み重ねられない</p>		<p>箱のサイズと中身がマッチしていない</p>
<p>とても重くて腰を痛める</p>		<p>水性ペンでモノの名前を書いているため水分でにじんで読めない</p>	

↳ ほかにも、「業務用ホチキスで留められた箱はあけにくい」といった意見や、「段ボールの上側にだけ字が書いてあった。段ボールは基本は積み重ねるものなので、横にも書いてほしい」といった意見もありました。「誰に何を送るか」と同じくらい、「どう送るか」も大事なのです。



親切な梱包ってどんなかんじ？

物資を送るときに参考になるのが、「プロの引越し屋さんクオリティ」です。



- ① サイズの揃った、しっかりとした段ボール箱に入れる。
- ② ひとつの箱に1種類の品物を入れる。
- ③ 上面と横面（できれば横2面以上）にラベルを貼って、品目と数量、重さ、送り先と送り元の住所を書き込む。
→段ボールは2列、3列に積まれていくので、ラベルは横1面では足りないことも。
- ④ ラベルは油性ペンでしっかりと書いて、しっかりと糊付け。
→付せん紙のように剥がれてしまうものはダメ。
→「洋服」など、だまかすぎの品名もダメ。「紳士用Tシャツ Mサイズ 50枚」など、性別、年齢、サイズを明記しましょう。とくに婦人服や子ども服ではすごく大事。
→「紙オムツ」も性別やサイズを明記しましょう。
SとLLのオムツとでは、対象が違います。



運びやすく、整理しやすく、一目瞭然で、配りやすい。そんな荷造りを心がけましょう。ちなみに引越し屋さんには、しばらく経つと梱包の段ボールを回収しに来てくれるところもあります。「配布後に出た梱包ゴミなどは回収して帰る」「不要だったものはあとで回収する」といったアフターケアまで、セットで支援できればベストでしょう。



困った支援物資の例

物資の支援で絶対にやってはいけないこと。それは「断捨離」です。

「いらなくなったから送ろう」「余ってるから送ろう」「これを機会に家の中を整理しよう」なんてもってのほか。あなたがいらぬものは、相手もいらぬのです。いえ、あなたには必要なものでさえ、相手には必要ないかもしれません。あなたがすごく好きなものでも、相手はそうではないかもしれない。

実際にあった「困った支援物資」のケースを見てみましょう。



使用済み下着・洗っていない服

→古着は必ずクリーニング。
きたないものはやめましょう。



ナマモノ

→お弁当が箱詰めで送られてきたことも。賞味期限の短いものを送るのは、被災者に「すぐに食べる」と強要しているのと同じこと。特定の行動を無理に促す支援はNG。



特徴の強い婦人服

→人によってサイズが細かく違ったり、好みの差も激しいので、個人の判断で送るのはとても難しい。婦人服はとでも残りやすい物資のひとつ。子ども服もサイズの難しさがあります。



寄せ書きや千羽鶴など

→まったく知らない人から届いても捨てにくいし困る。



ワレモノやガスボンベなど危険物

→ケガのもとになります。



「電池」のない機材

→ラジオは必ず予備の電池もいっしょに送りましょう。



水がないのにカップラーメン

→非常食のイメージがありますが、電気もガスも必要です。



楽器やレジャー用品

→使う人を選びます。学校などから求められているならいいかも。



口のなかの水分を奪いやすい食べ物、辛いもの

→水が足りないとしごぐです。



余ったホテルの備品

→歯磨きセットやカミソリなど。使い勝手が悪いと不評でした。



「凝った支援」「オリジナリティある支援」をしたがる人も少なくありませんが、重要なのは「必要とされている支援」です。そのことを忘れないでください。



変わっていくニーズに 対応するために

災害初期は政府、行政、自衛隊、大手企業などが大量に「生きるための物資」を被災地に届け、発生したゴミも自ら処理し、次回に必要なモノなども把握していきます。大手宅配業者が流通面で協力したりといったことも行われます。

そのうちに、必要なニーズがどんどん分かれていきます。たとえば夏に近づくにつれ、遺体安置所やゴミ集積所において深刻な問題になってきたため、消臭剤が役立つしました。ほかにも、夏には虫除けスプレー、冬にはカイロなどが喜ばれることもあります。こうした変わりゆくニーズに応えるため、マッチングにも工夫が必要です。

物資の集め方

NPOなどが物資や資金を集める方法もさまざまです。

ウィッシュリスト、マッチングリスト

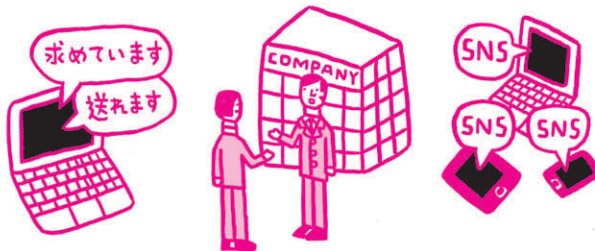
ネット上などで「こういうものを求めています」「これなら送れます」とニーズをマッチングするやり方です。欲しい人と、届けたい人とをマッチさせる掲示板も活用されました。

メーカーとの交渉

大口の物資支援を取り付けられるケースもあります。支援をしたいという企業は実はたくさんあります。上手に連携すれば、問題は一挙に解決することも。

SNSでの呼びかけ

口コミを広げ、多くの人から物資を送ってもらう方法です。どれだけ集まるのか予想が難しく、仕分けの作業も必要なため利用するには慎重に。





大きな企業による支援のしくみ

日本TCGF (The Consumer Goods Forum)

食品や飲料、衛生関連の大手メーカー、大手の流通業者、商社などで2011年8月に発足した組織です。

TCGFは世界70か国600社以上のネットワークで、これはその日本版です。業務プロセス改善や消費者ニーズの共有などが主な目的ですが、自治体と災害時支援協定を結ぶことで、必需品などを中心にスピーディな支援を行っています。

東京都と日本TCGFの 災害支援協定により想定されている支援物資

災害発生直後に必要な物資 (おおむね発災から3日間程度)	発災から4日目以降に必要な物資
<p>① 食料品</p> <p>おにぎり、パン類、カップ麺、飲料水、粉ミルク、缶詰(イージーオープン)</p>	<p>① 食料品</p> <p>精米、即席麺、食パン、レトルト食品、漬物、梅干、調味料、菓子類、果物、お茶</p>
<p>② 生活必需品</p> <p>毛布、紙おむつ、生理用品、哺乳瓶、ラジオ、乾電池、懐中電灯、箸、スプーン、使い捨て食器類、ラップ、固形燃料、ウェットティッシュ、ゴミ袋、蚊取り線香(夏季)、使い捨てカイロ(冬季)</p>	<p>② 生活必需品</p> <p>タオル、肌着、履物、作業服、軍手、鍋、炊飯用具、簡易コンロ、カセットボンベ、石鹸、歯ブラシ、ティッシュペーパー、トイレトペーパー、防水シート</p>

(参照:「日本TCGF」と「東京都」との災害時における物資支援協定の締結について
～首都直下型地震発生時における緊急支援物資協力体制の構築～
http://www.kirin.co.jp/company/news/2013/130311_01.html)

↳ 東日本大震災や新潟県中越沖地震の際の経験から、上記のような物資の備蓄と輸送ルートの確保が自治体との協力で行われています。

図解！ピースボートの倉庫を見てみよう！

国際交流NGOピースボートの下部組織に、一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンターがあります。ピースボートの災害救援は95年の阪神・淡路大震災をきっかけに世界各国で行われてきましたが、その経験を活かしたボランティア機関として災害ボランティアセンターが、東日本大震災の翌月に設立されました。

それに先立ち2011年3月26日には、石巻で民間物資倉庫管理を開始。物資の在庫を倉庫で管理し、物資の配布や炊き出しを行いました。

ピースボートによる支援は津波ヘドロのかき出しや仮設住宅のダニ駆除、海産物収穫まで多岐にわたりますが、ここでは倉庫管理の様子を見てみましょう。

倉庫マップを見れば、以下のようになっているのがわかります。

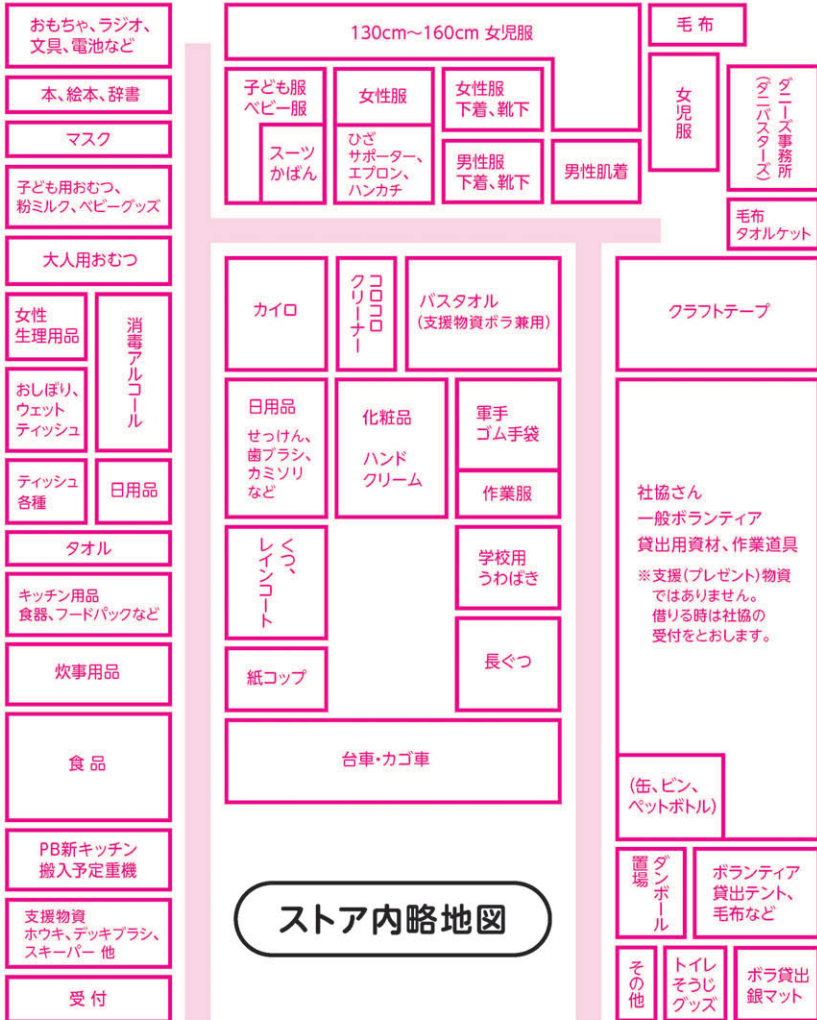
- ◎ よく使う食品、炊事道具、衛生グッズなどは前のほうに
- ◎ ボランティアの使う軍手や長靴なども前のほうに
- ◎ 本やおもちゃ、ベビー服などは後ろのほうに

物資は適切な仕分けと配布が重要です。ピースボートについては、東日本大震災のときに「物資は倉庫にこんなにあるのに避難所に届いていない！ピースボートは物資の横流しをしている！」というデマが流されたこともありました。そうしたデマは、支援者の足を引っ張るばかりで、有害でした。

このような被災地のなかにある「物資の中継所」はとても大事です。そのまま避難所に送ってしまうと負担になるモノを、近い場所にいったん集めて仕分け管理することで、いつでも使える状態にしています。在庫管理によりスムーズな補給も可能にしています。いくつかのNPOや社会福祉協議会(社協)もこのような活動をしています。



とても機能的に工夫されています。
この見取り図は「災害時に必要なもの」
「よく使うもの」を教えてください。



※ その他、デッキブラシ、バケツ、モップ、チリトリ、水きりワイパーなどは外の給水車のわきにあります。

(実際に使われていた見取り図から作成)